

色

埼玉県 春日部市立豊春中学校 1年
米島 夏綾 (よねじま かりん)

一枚の白い紙がある。その紙は突然、黒い絵の具で雑に物を書かれていく。またある時、その紙はくしゃくしゃに丸められていく。変わり果てたその紙を誰かが優しく元の姿に戻そうとしてくれた。しかし、どうだろう。所々が黒く汚れ、しわだらけになった紙は元の白い紙には戻らなかったのだ。この紙とは私達、人の心のことだと私は教えられた。

私が生まれた時、私の母は

「手と足は変に曲がっていない、ちゃんと指も五本ある。」

と、私が産声を上げるよりも先に私の父に確認した。母は疲労と苦痛から解放されていない表情のままだった。

「大丈夫、どこにも異常はないよ。」

父からそう聞くと、ようやく母は安心したように深く息をはいた。そして泣いている私をだきしめそっと声をかけた。

「あなたは大丈夫。私とは違うから。」

私をだきしめる母の左手に父がすぐに手をそえる。私のことを落とさないように。出産のために寝ないで長時間痛みと向き合った疲れのせいではない。母が生まれた時から母の左手は不自由なのだ。そのため、母は私がお腹にいる間毎日が不安でしかなかった。もし、自分と同じように障がいがあったらどうしたらいいのだろう。自分と同じ目にあってほしくない毎日心の中で願っていた。母の心の紙は黒く、しわだらけだったから。

「あなたにはどうせ無理でしょ。」

母は学生時代、社会人になってからも何度この言葉をかけられたか分からない。ただ、皆と同じように左手を動かすことができない。たったそれだけのせいで母は数えられない程汚い言葉をかけられた。言葉だけではない。仲間はずれ、無視、暴力すら受けた。学校はいじめが原因で転校をし、仕事も辞めざるを得なかった。必死に努力をし続け人に迷惑をかけないようにと、どれだけ立ち向かっても母の心の紙は日に日に黒く染められ、丸められ続けた。それでも母の心の紙は一度

たりとも破られることはなかった。母の左手を知った上で差別も区別もすることなく接してくれる友人がいたから。そして、母の左手に向かってプロポーズをした父と出会えたから。

私の父は主夫をしている。私が産まれた時に、母と役割を交代し育児に家事にと男性ながらこなしている。好奇心で見られる機会も多々あったが、父の心の紙は決して黒く汚れず、丸められることもなかった。まだ小さい私と公園で一緒に遊んでいただけで誘拐と誤解され、警察に通報され大騒ぎになった日でさえ父は笑っていた。どれだけ疲れていようと、父は私と母を笑わせ続けていた。その理由を私は最近になって初めて知った。父が主夫をしていく上で少しでも辛い顔をしてしまったら母の心の紙がどうなるか。たとえ間接的にでも母を傷つけてしまう可能性がある言動をしないように注意を払っていたのだ。そして、もう一つ。父は母の心の紙に色を塗り続けていたのだ。その色は黒ではなく、きれいで明るい色ばかりだ。

今の日本では一人の弱者や失敗をした人に対し、大勢の人達が集中的に口撃をする事例が毎日のように起きている。母のように障がいを持つ人達は常に心の紙を汚される心配をしなくてはいけない。言葉を口にする前にほんの少しでもいい、相手の気持ちを考えてほしい。インターネット上に言葉を書き込む前に、あなたの言葉を目にした人がどのように感じるのか考えてほしい。それは難しいことではないと思う。気が付けばあなたが手にしている絵の具の色は黒ではなくなっているだろう。

心の紙に色が塗られているのは黒だけではない。困っている人を助け、感謝の言葉を耳にした時、仲間と協力をして一つの物事を成し遂げた時、心の紙は鮮やかな色で彩られているはずだ。誰かが誰かの心の紙を黒く汚す一方で、人を思いやり手を差し伸べる優しさが至る所に存在している。私達、人間は一人では生きていけない。毎日たくさんの人と出会い、関わりを持って生活をしている。他人の心の紙と触れ合う機会はいくらでもある。小さな失敗を見逃さず自分の正義を押し付けるのではなく、暴力的な言葉で誹謗中傷するのではなく、常に相手の立場や気持ちに寄り添うべきだと私は思う。相手を見下し優越感に浸るよりも、人を思いやる温かい心を持ち、ささいなことでも協力をして感謝された方が自分の心の紙もきれいになっていくと思う。今日も鼻歌を歌いながら台所に立つ立派な主夫である父が、そしてどれだけ辛い思いをしても人に感謝する気持ちを忘れなかった母が母の左手を通して私にたった一枚の白い紙の大切さを教えてくれた。

一枚の白い紙がある。あなたの手には無数の絵の具が用意されている。どの色を選ぶのかは自由だ。私なら迷わずにこの色を選ぼう。誰もが笑顔になれるきれ

いな色を。次はあなたの番。あなたは、何色を選びますか。